

芸術と道德としての身体

須藤訓任（大阪大学）

身体に関するニーチェの思想を提示することによって、今回のシンポジウムにおける「堤題」に代えたい。萌芽的ではあるが、そこにはかなり斬新な身体理解が埋蔵されていると考えるからである。

ニーチェはあるところで、「要するにおそらくは、精神の全発達において問題となっているのは身体なのだ。それは、より高度の身体が形成されることが感知可能となってゆく歴史なのである」と述べている。ここで示唆されているのは、精神現象とはある振じれた形の身体現象であるということである。精神現象とは哲学であり宗教・道德であり、芸術であるが、それらは特定の身体状態の「記号言語」でありその「徴候」にはほかならない、というのがニーチェの着想である。

「記号言語」「徴候」という限り、精神には身体状態が直裁に単刀直入に反映しないし表現されているわけではない。むしろ精神は自分自身を——少なくともさしあたり——身体から独立自存した実体的存在として看取するのが大概であろう。ということは、身体に出自を持つはずの精神は、その出自を遮断した形で自己理解するということである。換言するなら、身体の自己否定的自己解釈、それが精神である。この自己否定的自己解釈としての「記号言語」の解読を通して、身体状態の復元を図るのが、ニーチェの構想する「生理学」にはほかならない。彼が美学を「応用生理学」として規定するのも、そうした文脈においてである。

発表では、この「(応用)生理学」の立場からするなら、精神現象のうち特に道德と芸術が身体現象としてどのような性格のものとして捉え直されてゆくのかに、焦点を当てることにしたい。というのは、ニーチェの発想によれば、道德と芸術とは身体機能の亢進ないし衰退という点において、対照的な方向性を持つとされるからである。そして、道德や芸術をはじめとする精神現象を身体のうちに取り込むことによって、身体にはどのような新たな可能性が、さらには、そもそも身体に関するどのような新鮮な理解可能性が、垣間見えてくるのかを展望できたなら、と願っている。